

ディッペルの『身上書』：一敬虔主義者の変態

伊藤，利男

<https://doi.org/10.15017/2332592>

出版情報：文學研究. 87, pp.105-145, 1990-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

ディッペルの『身上書』

—— 一敬虔主義者の変態 ——

伊 藤 利 男

一

急進的敬虔主義者あるいは教会離脱主義者たちは、みずからの信條のゆえに、世の平坦な道をあゆむことができず、その人生は多くのばあい波瀾と苦難にみちていたが、その最たるものはクリスチャーヌス・デモクリトウスの筆名で知られたヨーハン・コンラート・ディッペルであろう。彼の生涯のあらましは、以下に述べるとうりである。⁽¹⁾

ディッペルの家系は、彼自身が言うところによれば、父方も母方も、「宗教改革以来すでに僧侶団のなかに搖ぎなく続いてきた」⁽²⁾家柄であった。父ヨーハン・フィーリップ・ディッペル（一六三六—一七〇四）は、最初は学校教師をしていたが、のちにルター派正統教会の牧師となった人であった。ディッペルは一六七三年八月十日ダルムシュタット近郊のフランケンシュタイン城で生まれたが、その幼年時代については、ほとんど何も伝えられていない。ダルムシュタットのギムナジウム（＝古典語高等中学校）では、彼の知力が同級生たちのそれを遙かに抜きんでいたために、彼は身辺にいつもヨキ家ノ精 Spiritus familiaris をもっているにちがいない、という評判がたった。

一六八九年この野心的な青年はギーセン大学に入学し、当時ドイツの各地で勢力を増大しつつあった敬虔主義に對抗して、ルター派正統信奉の闘士となることを志して神学をおさめ、かたわら医学をもまなんだ。初め彼はマグステルの学位を、無知をおおいかくす蓋にすぎないと考えて、軽蔑していたが、しかし將來大学教授として十分な活動をするためには、この学位をとることが不可欠であることを聞かされて、一六九三年『無ニツイテ』De nihiloというテーマで公開論争試験をうけて、マグステルの学位を獲得した。しかしこの試験のために学資をほとんど使いはたしてしまったディッペルは、父の要求にしたがって大学を離れ、オーデンヴァルトのある官吏の家の家庭教師になった。そのころ彼は、敬虔主義者たちを激しく攻撃する論文を書いたが、それは大学で講義をする許可をもらうべく、正統主義の神学部のご機嫌をとるためのものだった。しかしこの論文はかえって反感を呼び、彼は宮廷筋のひいきにもかわらず、講義の許可を得ることができなかった。

そこで彼は正統信仰の總本山であるヴィッテンベルクの大学に地位を得て、反敬虔主義の活動に従事しようともくろみ、しかるべき人物の紹介状を手に入れて、当局にはたらきかけたが、しかしやはり目的を達することはできなかった。そのため、彼はヴィッテンベルクとは逆の方向に位置するシュトラースブルクでその目的を達成しようとして旅立ったが、しかしこの町がシュペーナー（フィリップ・ヤコブ、一六三五—一七〇五）によって目覚まされた敬虔主義の本拠地のひとつであることを知らなかった。

シュトラースブルクに到着したディッペルは、愉快な学生生活を満喫し、さまざまないたすらにも加わるが、しかし他の学生たちとはちがって、女性関係で脱線することはなかった。ちなみに彼はしばしば、自分は生涯女性とは何のかかわりもたなかった、と自己証言している。彼は手相学と占星術の個人講義をおこなったが、しかしそれは、これらの学問に献身するためでなくて、彼自身の言うところによると、自己の世界像を拡大するためであり、またある程度まで生活費をかせぐためでもあった。また彼はシュペーナーの著書を読んだが、それは主として論争につよく

なるように、という意図からだったようである。やがて起こった学生騒動にまきこまれたディッペルは、借金で首がまわらなくなっていたこともあって、もはやシュトラースブルクに滞在を続けることが不可能になり、この町を出奔し、プファルツ戦争のさなか、いくつかの冒険を体験して、故郷のダルムシュタットに逃げかえった。

この帰郷を機にディッペルにとって、真理の認識を求めての内なる闘争にみだされた苦しい時代が始まることになる。彼がこの時期、正統信奉の立場をすてて敬虔主義へ、さらに急進的敬虔主義へ転向したことについて、たしかに敬虔主義に好意的な宮廷筋のひいきを得たかったという理由ももちろん認められるが、しかしそれ以上に、彼が良心の衝動に駆られたことに注目しなければならない。彼は敬虔主義的著作家となり、『正統信奉者たちノ冥府体制』*Orthodoxia Orthodoxorum*, 1697 によって、一連の反正統主義の著作活動を開始した。一六九七年ゴットフリート・アルノルト（一六六六—一七二四）が二人の信奉者をもなつてギーセンへやってきたとき、ディッペルは彼らと親しく交際し、そしてすでにみづからの内部で準備していた敬虔主義者への転向を決定的にしたのである。彼は今や正統主義を転覆させることをおのれの使命と見なした。一六九八年、彼は『抗議派ノ教皇制度ニ鞭ヲクワヘル』*Papismus Protestantium vapulans* という題の論文を発表したが、プロテスタントの教会を教皇制度なみとしてこきおろすその口調は、大きなセンセーションをまきおこし、そのため、当時彼が受けていたギーセン大学神学教授職への推薦は立ち消えとなり、ヘッセン・ダルムシュタット方伯領の宗教局は、彼にたいして宗教裁判を開始し、彼は一七〇二年まで何回も審問を受けることになる。この裁判はディッペルの主張を異端として、この論文を撤回させることを目的としていたが、その審理の継続中に彼はあらたに、『抗議派の鞭打られた教皇制度の傷孔に注ぐぶどう酒とオリーブ油』*Wein und Oel in die Wunden des gestäubten Papsitums der Protestierenden*, 1700（以下、『ぶどう酒とオリーブ油』と略記）を発表したのである。これによってディッペルは今や宮廷筋を含めてあらゆる方面からの愛顧を失ない、にわかにヘッセン・ダルムシュタット方伯領の境界線を越えて、逃亡せざるをえなくなった。

逃亡後の彼の足どりはしばらくの間不明であるが、そのころ彼が化学の研究と錬金術に熱中していたことが、彼自身の証言によって知られている。一七〇四年になると彼は、プロイセンの皇太子フリードリッヒ・ヴィルヘルム一世の式部官であるアウグスト・フォン・ヴィットゲンシュタイン伯爵の庇護を受けて、ベルリンに滞在し、化学の実験に従事している。ところで、ポメルン地方にあるスウェーデン系の教会を管轄する地方總監マイアーは、敬虔主義者たちを弾圧することで勇名をはせていたが、ディッペルはこのマイアーのやり方を批判する神学上の論文を公表した（一七〇七年）ため、マイアーの恨みをかい、その働きかけによって投獄されるはめになった。ほどなく釈放されたものの、また新たに逮捕の危険が迫っていることを察知したディッペルは、オランダに逃げ、アムステルダム郊外で医業をはじめて成功したが、この間の一七一一年には、『動物的・感覺的生活の病氣と医薬』と題する論文によって、ライデン大学より医学博士の学位を授与された。このオランダ滞在中、彼はホップスやデカルト、スピノザの著作を精読し、これらの思想家が意志の自由を否定することを、つよく批判した。またあらゆる種類の信団（*Sette*）の人びとと交際した。彼がその頃書いた『牧者とその群羊』は、敬虔主義的啓蒙主義の綱領とも呼ぶべき論文であって、異常なセンセーションを呼びおこし、かつまた、彼の教会内の敬虔主義との完全な断絶を世に明らかにするものであった。

一七一四年ディッペルは、恐らくはまた新たな筆禍問題からオランダを去って、当時デンマーク領で敬虔主義者たちにとつて自由な避難所であったアルトナに移住し、短時日のうちに宮廷筋から多大な愛顧を受けるようになったが、しかしこの幸運も長続きしなかった。というのも彼は、後援者で有力な貴族であるレヴェントロー伯爵夫妻のことをデンマーク国王に密告したために、誹謗罪のかどで終身禁固囚としてハンメルフースの牢獄に収容されたのである。

一七二六年ディッペルは恩赦によって釈放されたものの国外追放の処分を受けたので、ドイツへ帰ろうと考えた

が、彼の崇拜者であるひとりのスウェーデン人の招待を受けて、クリスチャンシュタットへ赴いた。このスウェーデン滞在は一七二八年の初めまで続いた。同国の正統派の僧侶団は彼の滞在に激しく抗議したが、貴族階級は彼に恩顧を示し、彼は滞在を許されたのみならず、医者として病床の国王を診察させたのであった。しかしディッペルには、貴族たちは聖職者たちに自分たちの権勢を示すために彼を利用してはすぎない、ということが分り、またスウェーデンの敬虔主義者たちの私的集会（Konventikel）が既成の教会のやり方に似てきたことが、彼を失望させた。一七二七年彼は、『混沌の王国の霧からはらいきよめられたキリストの福音の明るい輝き……』を発表して、ルターの義認論に対抗する倫理的キリスト教を主張したが、この論文は彼を異端の論者として弾劾するきっかけとなった。一七二八年の初めスウェーデンの国会は、ディッペルの国外追放を決議した。

コペンハーゲンを経てドイツに帰ったディッペルは、リューネブルク、ツェレ、リーベンブルクの各地に暫時滞在したのち、翌一七二九年、かつてベルリンで彼の庇護者であったアウグスト・フォン・ヴィットゲンシュタイン伯爵の世話で、ヴィットゲンシュタイン伯爵領のベルレブルクに伯爵カジミールの歓迎をうけて定住した。多くの急進的敬虔主義者、教会離脱主義者たちや、あらゆる種類の信団の人びとが住むこの町で、彼はこれらの人びととの交際を避けて、ほとんど世捨て人のような静かな生活をおくり、一七三四年四月二十四日夜半伯爵アウグストのヴィットゲンシュタイン城にて急死した。彼の全著作は一七四七年ヴィットゲンシュタイン＝ベルレブルク伯爵家の侍医カンツによって、三巻の本として刊行された。

「筆名として彼が——内面的な論理の適合性をもって——クリスチャーヌス・デモクリトウスをえらんだのは、人間たちに目を向けるために神の真理を観察することから注意をそらされることがないように、（心のうちで）デモクリトウス（＝古代ギリシャの哲学者・筆者）同様に自分で自分の目をえぐりってしまったからという。」³

ディッペルは、おなじ急進的敬虔主義者と呼ばれても、ペーターゼン（ヨハン・ヴィルヘルム、一六四九—一七二七）のような場合とは違って、大部の独立した自叙伝をのこさなかった。『ドイツ人たちの自己証言』の編者マリアンネ・バイヤー—フレリッヒは、カンツ編の『クリスチャーヌス・デモクリトゥス全著作集』（一七四七年）の中から、自伝的性格をもつ叙述として次の六つを挙げている。⁴⁾

一、『身上書』すなわち、死んだけれども生きているクリスチャーヌス・デモクリトゥスの簡潔に書かれた履歴』（以下、『身上書』と略記する・筆者）（『抗議派の鞭打たれた教皇制度の傷孔に注ぐぶどう酒とオリーブ油』に付録として添えられたもので、一六九八年の執筆。『全集』第一卷三七九—四一九ページ）

二、『二三の人身攻撃にたいするクリスチャーヌス・デモクリトゥスの答弁』（『全集』第一卷六七—一七二ページ以下）

三、『化学ノ運命』（『光と正義への道案内第二部』序文の一部で、『全集』第一卷九一—九二ページ以下）

四、『スウェーデン滞在中クリスチャーヌス・デモクリトゥスの身におこった不思議な出来ごとの歴史的な物語』（『全集』第二卷六三—一六五—一六六ページ）

五、『身上書』（クリストフォルス・ヴォールゲムートにたいする反論に添えられたもので、一七三二年執筆。『全集』第三卷一四七—一八五ページ）

六、（略）

右のうち一、から五、までは全文または抜粋が『ドイツ人たちの自己証言』の第七卷『敬虔主義と合理主義』に収

録されている。筆者はカンツ編『全集』を見る機会に恵まれず、また他の資料ももちあわせないので、ディッペルの自己証言については、この『敬虔主義と合理主義』にたよるよりほかはない。このような断片的な資料から導きだされるものが、年代記的な観点からは決して完全なものとは言えないことを、筆者は十分に承知しているが、しかし少なくとも一、の『身上書』はそれ自身で完結したものであり、それが原著者の人間的・个性的特徴を伝えるには十分なものであろうということも、期待されるのである。本稿ではこの『身上書』に限って考察の対象とし、他の自伝的叙述は必要に応じて参考にするにとする。

『身上書』が付録として添えられた『ぶどう酒とオリーブ油』の完全な標題は次のとおりである。

『抗議派の鞭打たれた教皇制度の傷孔に注ぐぶどう酒とオリーブ油。すなわち、抗議派ノ教皇制度ニ鞭ヲクワヘルと名付けられた書物を裁くすべての人にたいするクリスチャーヌス・デモクリトウスの率直な、キリスト教徒にふさわしい、さらなる言明、証明および弁明』

そして、これへの付録の題は、

『身上書、すなわち、死んだけれども生きているクリスチャーヌス・デモクリトウスの簡潔に書かれた履歴を含む有益なる付録』

というのである。これらの題名は、この身上書の性格を暗示している。つまり、それは論争文『ぶどう酒とオリーブ油』の説得力を強化するのに有益な付録としての『身上書』なのである。『ぶどう酒とオリーブ油』そのものの性格については、筆者はこれを読んでいないので正確なことは言えないが、この刺激的な題名とこの本がまきおこしたセンセーションから推して、はげしい攻撃性かつよい自己主張が考えられる。『付録』の標題に「死んだけれども生きているクリスチャーヌス・デモクリトウス」とあるのは、ディッペルが死んだ、という噂がしばしば流れたことと、関連する。

さて、この『身上書』が書かれたのは、すでに見たように、シュトラースブルクからダルムシュタットへ帰ってきたディッペルが、アルノルトとの交際によって敬虔主義に、それも急進的な敬虔主義に決定的に転向し、過激な論争文『抗議派ノ教皇制度ニ鞭ヲクワヘル』を発表したのと同じ一六九八年の秋、彼が二十五歳のときである。二十五歳という年齢が、一般的な意味での自叙伝執筆の年頃でないことは、言うまでもない。

以下、『身上書』の内容をバイヤー＝フリーリッヒ編『ドイツ人たちの自己証言』第七卷『敬虔主義と合理主義』に収められた本文によって考察するが、そこからの引用には末尾の（ ）のなかに数字を付して同書のページを示すことにする。引用文中の「 」のなかの記述は筆者による補足である。また必要に応じて（ ）のなかに簡単な注をくわえる。引用文中の仮名遣いに片仮名を用いた部分と漢語を片仮名で記した語は、特にことわりがない限り、原文ではラテン語が使われている。

三 — 1

さて、ディッペルの『身上書』は次のように始まる。

「悪魔自身がするのと同様に、神の子たちの過ぎさったことどもを好んで書きあつめ、それによって現在の（神の）恩寵の流露と効験をいろいろなやり方で見くびろうと努めるのは、世の一般的な誤りである。とりわけ、以前の状態の思い出がまだ鮮かに記憶のなかに浮んでいて、たとえば、主とその懲らしめに身をゆだねた者が、モーゼの椅子にすわりキリスト教の実践について弁舌をふるいだしてからまだ日が浅く、あるいはまた、他の弁舌者たちの氣にいられるよう行動したりふるまったりすることができなかった現在が、そうである。」(73)

これまで教会内敬虔主義者たちのつつましかな履歴を読みなれてきた者には、ディッペルのこの履歴の書きだし

は、そのバロツク的な文体、挑発的な口調、どぎつい比喩によって、またその難解な語句によって、いささか衝撃的な印象を与えざるをえないであろう。そして読者は早くもここで著者の強烈な個性と触れあうのである。最初に彼は、たしかに一般論として世の中を批判する。神の子、すなわち信心ぶかい敬虔な人びとに關して過去の事績ばかり書きあつめて、神の現在の恩寵の流露と効驗を見くびろうとするのは、悪魔も同然のやり方だと攻撃するが、しかしその際、彼自身は自分をひそかにそのような現在の恩寵の流露と効驗を受けた者と見なしているのである。彼はまた、イスラエルの民をエジプトからつれ出して約束の地へ導いてゆくモーゼ（『旧約聖書・出エジプト記』）に自分をなぞらえて、キリスト教の実践について弁じ、以来、他の弁論者たちに迎合するような言動はしなかつた、というのである。ここまでの記述には、「私」という字はどこにもないが、これに続く叙述ではディツペルは、自分を前面におし出して、『身上書』を書くにいたつた動機を次のように述べる。

「さて私にとって、ひたすらキリストのみに気に入られようと努めるすべての人びとにとつてと同様、外にいる人びとから、また偏見と欲情のうろこがまだ目から引きぬかれていない神の子たちからさえも、さまざまなやり方で裁かれるのは、とるにたりないことである。しかも、この世に私を真に回心した者と見なす人間がたとえひとりもいなくとも、私自身がおなじことを望んでいるのである。なにしろ人間は、神の賞賛と同様に偏見をも必要としないではないのだから。偏見は、そのような裁く者たちによって置き石されて、私が天上からさしてくる光にもとづいて認識し率直に告白する神の真理の歩みを邪魔するのである。そこで私は、私のこれまでの生き方について手短かに、万物を見そなわす神の目の前のごとく、嘘いつわりも下ごころもなしに、みずから報告しよう。」（73—74）

つまり、自分が世の中から裁かれる身であることを自覚しているディツペルは、裁かれること自体はむしろ歓迎するが、その裁き手たちが偏見にもとづいて自分を批判攻撃することを嫌うのである。なぜならば偏見は、自分が認識した神の真理の告知を妨害するからである。このような世の偏見をただしたいというのが、彼の身上書執筆の動機で

ある。彼は神の目のまえでのごとく、自分のこれまでの行状を率直に告白しようというのである。

告白は、率直であるか否とにかかわらず、かならず他人にたいして、また自分自身にたいしてさえも、何らかの効果をよぼすものである。ディッペルは、自分の告白が与えるであろう効果を予測し、それが誤解されることを恐れ、この告白の意図を右の引用に続いて次のように主張する。

「それは、私自身を清浄化するとか、あるいは悪魔と私の肉とによって行なわれたことを弁解するためではなくて、むしろ、私がこれまで歩んできた道を率直に述べることによって、世俗とその一党に、もともとキリストによって絞首の刑にさだめられていた、そして汚辱と誹謗よりほかの何物にもあたいたくない私の古い人間（『アダム、原罪』を、中傷と嘲笑によって十分痛めつけ、厳格に裁くためのいくばくかの機会を与えるためである。しかしまた、神の子たちには、この私を見本として自分自身をもっとよく認識し、私とともに新たな試練の恩寵をもっと真剣に熟視し、さらに謙虚なる感謝をもってその恩寵をほめたたえる機会を与えんがためである。）」(74)

一読して明らかのように、彼の意図は三つの主張から成りたっている。第一は、この身上書によって自分は弁明を試みようとするものではない、という消極的な主張である。第二は、第一の主張の裏返しとして、俗世の人びとにディッペル自身の過去を批判する機会を与えようという積極的な、しかし同時にまた挑発的な主張である。そして第三は、神の子たち、すなわち真のキリスト教徒にならうとしている人びとに、自分自身を先例として、「自己」を認識し、神の恩寵を感得する機会を与えよう、という教育的な主張である。

そこで問題は、これらの目的の前提として、「私のこれまでの生き方」が本当に「嘘いつわりも下ごころもなしに」報告されるかどうか、ということであるが、その点は、「万物を見そなわす神の目の前のごとく」というからには、「のごとく」という語が少し気になるものの、原著者のことはを大筋において信用するほかないであろう。ただし、自伝的叙述一般について言えることだが、嘘いつわりも下ごころもなく報告された事実、そのまま真実であるという

ように、考えてはならない。なぜならば報告者の主観的な、また個人的なものの見方にはおのずから偏見ないし歪曲がしのびこみやすいのみならず、意識的な、あるいは無意識的な事実の秘匿がしばしば行なわれるからである。この点は、ディッペルのような強烈な個性のばあい、とくに注意しなければならぬ。そこでまず、第一の主張、つまり自己弁護ないし弁明を行なわないという主張は、一般的には言うにやすく行なうにしたい事柄であるが、ディッペルのばあいこの主張がつらぬかれるのかどうか、きびしく観察する必要がある。第二の主張はその挑発的な性格によって注目される。つまり、自分の過去を俗世のまえにさらけ出すことによって、それにたいする俗世のがわからの批判攻撃を誘きだそうとする意図であるが、しかしディッペルが今や立っている敬虔主義の、それも急進的な敬虔主義の立場から見れば、俗世は神の恩寵を知らない人びとから成りたっているのであるから、そういう俗世には、彼の「古い人間」を裁く資格などないはずである。にもかかわらず、彼が自身の過去を俗世の批判にゆだねようとするのは、自身を俗世と同一視することか、さもなければ、俗世を挑発することではかない。第三の主張は、多くの敬虔主義者たちの自筆の身上書ないし履歴の目的とおおむね一致するものと見なしうる。それは自分自身のばあいを先例として提示し、人びとの信仰心をふるいおこさせ強化するという、信仰促進 (Erbauung) の意図である。そういう身上書の代表的なものとして、敬虔主義の創始者シュペーナーのそれがあることを、筆者はかつて指摘した。⁵⁾ 身上書とはもともと弔葬説教において朗読されるために第三者の手によって書かれたものであるが、シュペーナーはそういう弔葬説教として自分の身上書を信仰促進の目的をもって自分で書いたのである。これにたいしてディッペルの身上書には、弔葬説教という目的が完全に欠落していることが、特徴的である。

それにしても、ディッペルの身上書はシュペーナーのそれと何と異っていることか。シュペーナーは自分の誕生、父母、洗礼についてこう書いている。

「私ことフィリップ・ヤコブ・シュペーナーは、神のみ恵みによって一六二五年一月十二・二十三日 (一六二五

年は一六三五年の誤植、一月十三日はユリウス暦により、二十三日はグレゴリオ暦による日付）ラッポルトシュタイン伯爵の居住地である上部エルザスのラッポルトツヴァイラーにおいて、この世の生を享けた。私の両親は、ラッポルトシュタイン伯爵家に四十数年間、最初は若君の傳育官ならびに家庭教師として、のちには統治の任につかれた殿様方の顧問官兼記録係としてお仕えし、一六五七年二月この世を去ったヨーハン・フィリップ・シュペーナードと、もとラッポルトシュタイン伯爵家最高顧問官兼町奉行を勤め、のちに神聖ローマ帝国直屬都市コルマルの法律顧問となったヨーハン・ヤーコプ・ザルツマン氏とその妻でマイヤー家出身のツェチリエ夫人の嫡女であるアガータ夫人であるが、この母は〔父の死後再婚した相手である〕上記コルマル市の顧問官兼孤兒院長ルートヴィヒ・バルト氏が死去してふたたび未亡人となつて、フランクフルト・アム・マインの私の家にはばらくくらしのち、一六八二年三月八日この世の生涯をとじた。私の愛する、今はないこの両親は、〔私の誕生の〕すぐあと聖なる洗礼の水浴みによって、私を神の同盟に加入させ、したがつて私の幼年時代、神意にかなつた教育にできる限りの力を尽してくれた。〕

右に相当する部分をディッペルは次のように記述する。これはさきほど引用した身上書冒頭部にすぐ続く箇所である。

「しかし、通常の身上書の流儀にならつて、私がキリスト教徒たるにふさわしい両親から罪のうちこの世に生まれ、聖なる洗礼によって再生し、生命の名簿に記載された（＝神のみ手にゆだねられた、の意）というようなことに、注意を喚起することは不必要である。こういうことはある程度まで、証明しがたいが不可欠の仮定であり、これについて私は何の確信もたず、私は神の目の前で眞実を書くことと決心したのだから、これらのことを無視して通りすぎるのが至当である。」（74）

シュペーナードの口調は、その人柄にふさわしく穏やかで敬虔そのものということができよう。それにひきかえて、ディッペルのそれは激越とまではいかなくとも、そつけなく、身を固くして余計なことはいっさい書くまい、という

ような姿勢が見てとられる。たとえば両親の家系についてディッペルは、のちの一七三二年の『身上書』では、「父方からも母方からも私は、宗教改革以来すでに僧侶団のなかに搖ぎなく続いてきた一族に生まれた」と明記するのだから、この一六九八年の『身上書』で両親のことを無視したのは、まさに意識的な秘匿といわなければならぬ。二十五歳のディッペルはさらに、幼年期に受けた教育、学校時代について、意識的な秘匿の態度をとり続けようとする。彼は右の引用部に続いてこう記すのである。

「また私は簡潔なことを好ましく思うので、幼年時代の私の身におこったことごとや、またすでに小学校では他の子供たちのあいだで、鳥どものなかのふくろう（フクロウは知恵の象徴）のように見なされて、ねたまれたが、それというのも私の何でも出来る才能は、愚行のわずかずを僅かばかりの善行と同様に、やっつけのけることができたからであり、したがって、私がまだ十四歳にもならぬうちに、すでに私の同窓ノ生徒たちのあいだに、私にはヨキ家ノ精がついているにちがいない、という噂がたったなどということは、無視して通りすぎよう。」（74）

幼年時代の体験・経験は、簡潔さのためならば無視していいほど、無価値なものかどうか、おおいに疑問である。というのも一七三二年の『身上書』には、幼年時代の体験がいくつか詳細に語られ、それらがのちの人生の発展と関係づけられているからである。しかしまた一方では、自分の才能について彼は、「無視して通りすぎよう」と言うことよって、それがどんなにすぐれていたか、強調し誇示するという巧妙な論法をも心得ているのである。いづれにせよ、このような自己の才能にたいするほとんど絶対的な自信、およそ「敬虔」ということばにふさわしからぬ強烈な自己意識は、いったい何に由来するのであるか、いずれ詳細な検討を要する問題である。とにかく、十六歳までの少年時代、この『身上書』で見るかぎり、彼はまさに自信のかたまりであった。彼は右の引用に続いて次のように書く。

「私の先生たちの目にさえも私はすでにひとつの奇蹟であった。先生たちは未来の世ノヒカリとしての私を、植えつ

けられた善いものが停滞したり抑圧されたりしないように、早く大学へ行かせようと急いだ。私自身は、羨望者たちの中傷に出会って屈辱をあげわっても当然のところだったが、一日一日と調子をたかめ、そして満十六歳にもならないうちに、すでに三ハカセ（博士）〔分の学識〕を孕んで、ギーセンの大学に赴いたのである。」(74)

この大学時代についての報告で新たに現れてくるのは、宗教の問題である。それは以下のとうりである。

「そこ（＝ギーセン大学）では、ちょうどそのころ正統信奉といわゆる敬虔主義者たちとの間の不和があらわになりつつあった。ところで私は正統信仰の家の生まれであり、また、私が当時たいへん尊敬しており今もおその善意あふれる愛と誠のゆえにその靈魂の救いのため神のおおいなる祝福を願っている私の先生ガタも、改革やいつわりの預言者たちにたいして懸命に反対されていたので、私は、そのためにたとえ国外に退去しなければならぬことになっても、純粹信仰をまもりとうし、「神ではなくて」人間に氣にいられるために信仰をよそおうようなことはしまい、とたく決心した。」(74—75)

この叙述は、彼が敬虔主義者たちに敵対して、正統主義の立場に立ったことの理由づけにすぎないが、しかしここには注目すべき点が二つある。その第一は、彼が正統信奉を擁護するのは、正統信奉の家に生まれたから、また先生たちも反敬虔主義的だから、という外的な、偶然的な理由からであって、内的な理由、つまりこのたがいに対立する二つの信仰様態を比較検討した結果とか、内面の葛藤のちに達した宗教的確信の結果とかではない、という点である。第二は、当否は別として、いったんきめた信条は、たとえ国外退去のうめきにあっても、まもりとおそうとする固い決意である。純粹信仰をまもりとおすということは、すなわち神によみされる道であって、人間たちに氣にいられるためではないという觀念が、この決意の根底にあると考えられるが、実は、この決意が注目されるのは、決意そのものではなくて、決意が、つまりまもうとする対象は変わっても、信条のためならば国外退去も辞さないという決意が、彼の人生において一度ならず実行に移されたということである。彼がこのような自己の将来の運命を、もし本

当にわずか十六七歳で、予感していたとか、あるいは先取りしていたとすれば、それは驚嘆にあたいすることである。なお、彼の決意についてひとつだけ付言するならば、人間たちの氣にいられるように信仰をよそおうようなことをしまい、という態度は、正統主義的というよりも、むしろ敬虔主義的である、と云うことができよう。

ところで、ディッペルがギーセンで実際に志向し行動したことは、どのようなものであったか、彼は次のように報告する。

「その間、私が思考し思索した唯一のことは、できるだけ早く偉い人になって、その分いっそう大きな権威と名声をもって敬虔主義者たちになりたいして私の運をためすことができるようになりたい、ということだった。そして私のこの意図を、家ノ貧シサが妨げなかったならば、私は短期間のうちにシングクブ（神学部）とイガクブ（医学部）でハクシ（博士）になろう、と完全に決意したことであろう。この目的のため私はこの二つの学部の権威者たちによって熱心に修練にはげんだのである。また私は討論術や論駁法においても、学問ある庶民たちの信望を得る機会をのがさなかったが、やがてそのために競争者たちの中に嫉妬と中傷を日一日と積みかさねることになった。それというのも、私の鋭い理性のおかげで私は、ユダヤ人や異邦人たち（＝ともにキリスト教の敵の比喩）の虚妄の一切合財をたやすく追いつめることができたからである。けれども私は、イエスがキリスト（＝救い主）であるということ、まだ証明することができなかった。いわゆる敬虔主義者たちにたいする私の競争心は日ましに増大して、私はあらゆるやり方で、彼らに私の敵意を見せつけてやったので、そのため、神学的にもっと思慮ぶかくて、公然と蠅螂の斧をふるようなことを敢えてしない最善の友人たちから、しばしば叱責をうけざるをえなかったが、それというのも、正統信奉はどう見ても王座から転落しようとしていたのにたいして、敬虔主義者たちは神の先慮によって（＝傍点は筆者）、俗界ノ権力を自分たちの味方につけようとしていたからである。」（75）

右の記述を読んで読者は、野心に駆られた、経済的に貧しい青年のすがたをたやすく思いうかべるだろう。しかし

彼は、家が貧しいから偉い人になろう、などと考えたのではない。世俗の名譽を求めるのは、正統主義のために敬虔主義に対抗しようという、宗教的な、だがしかし外面的な理由からである。とにかく、彼自身言うように、鋭い理性をもってしても、「イエスがキリストであることを証明することができなかった」段階でのことである。彼は正統主義と敬虔主義の対立を見るとき、その優劣を、どちらがより多く真であるかという観点からではなくて、それぞれの世俗的な勢力の強弱という見地から観察する。正統信奉の衰退傾向にたいして敬虔主義者たちが着々と勢力をまして、「俗界ノ権力」を味方につけようとしていたこと、つまり、宮廷筋の愛顧を獲得しつつあったという時代の趨勢を明敏に見てとったのである。その際、正統信奉擁護の尖兵であるディッペルの、敬虔主義者たちが「神の先慮によって」俗界の権力を味方につけようとしていたという観察は、筆者にはたいへん興味ぶかい。というのは、まず第一にしばしば指摘されるように、反世俗の態度が敬虔主義の基本的な原則のひとつであるのにならして、ギーセンやダルムシュタットにおいては敬虔主義が早くもこの時期に世俗に接近し利用しようとする傾向を見せていたこと、第二にこの傾向を若年のディッペルがすばやく見てとったということが注目されるのである。しかしこの二つ以上に興味をそそられるのは、「神の先慮によって」という理由づけである。「神の先慮」は、敬虔主義者たちをもっと好んで用いたことばのひとつである。人間は神の先慮によって正しい目標に導かれる、というのが敬虔主義者たちの信仰である。もしこのような先慮信仰をギーセン大学の学生ディッペルがもっていたとすれば、彼はこのときすでに内面的には半分以上は敬虔主義者になっていた、と言わなくてはならない。しかし本当のところは恐らくこの「神の先慮によって」は、その当時の彼の視座からではなくて、身上書を書いている現在のそれから出てきた言い回しではないだろうか。もしそうだとすれば、敬虔主義者たちは世俗に親しんではならないのだから、彼らが神の先慮によって俗界の権力を味方につけようとしているというのは、たいへんな皮肉であると言えよう。それではディッペルは、意識的にこのような皮肉を書いたのだろうか。おそらく、そうではあるまい。意識的ではないからこそ、この当時としてはありふれ

た言い回しが、いっそう皮肉に聞こえるのであろう。

正統主義か敬虔主義かの問題に関連して、ディッペルはさらに次のような注目すべき発言を行なっている。右の引用部に続いて、

「しかし私は男らしい態度をとり続けた。そして当時すでに神が私の目を、正統信奉と敬虔主義者たちの両方のそれぞれでどこが不都合なのか、見てとることができるまでに開いてくださり、そして私には正統派も敬虔主義者たちも、いずれも決して純粹ではない、ということが分っていたにもかかわらず、もしも自分が中立的な態度しかとらないで、敬虔主義者たちにたいして正統派の批判をくわえることを止めるようなことにならば、それは私を矮小化し、そして私が信心家ぶった臆病者だという論拠になると思われた。というのも、もしも私がそういう態度をとったならば、これまで私を搖ぎない豪勇のゆえに驚嘆の念をもってながめていた人びとはすぐさま、私がその時どきの利害のために時勢に順応し、しだいに信心家ぶることを覚えていくことになる、と考えるだろうと思われたからである。時勢に順応するには私は、あまりにも高潔な、あまりにも誇りたかい男であった。そういう男として私は、すべての人びとが最後には私のやり方にならざるをえなくなるだろう、と固く思いこんでいた。」(75)

この箇所を読んで、注意ぶかい読者はこの身上書にこれまでなかった新しい口調に気がつくであろう。それは弁明である。彼が正統主義にも敬虔主義にも欠陥があることを知りながら、正統主義擁護、敬虔主義攻撃の姿勢をとったのは、要するに、時勢に動かされない自分の男らしさを世の人びとに見せつけるためだった、と言うのであるが、彼のような純粹で正直な男が、自分では完全に信じてはいない二つのものをまえて、その一方に与して他方を批判攻撃するというような陰險な言動をすることができようか、はなはだ疑わしい。そもそも、学生時代のディッペルが、正統信奉と敬虔主義のそれぞれにどのような欠陥を見出したのか、具体的な説明がないから、その点は措くとして、むしろ、この両者に欠陥を見出したという発言も、「神の先慮によって」というばあい同様に、身上書を執筆し

ている現在の視点からのもではないだろうか。初め正統主義者として出発し、次にシュペナーの教会内敬虔主義に接近し、そして今アルノルト流の急進的敬虔主義につよく影響されたディッペルにして、はじめて正統主義と教会内敬虔主義の欠陥や、純粹でない点が、はっきり見えるのではなからうか。もしそうだとしても、しかし、彼が「男らしい態度をとり続けた」ことも、搖ぎない豪勇の持ち主であったことも、誇りたかく、時勢に順応しなかったことも、けって嘘いつわりではないであろう。彼は、学生だった当時、時流にのって敬虔主義者になるには、あまりに高潔な男だったことはたしかであるが、しかし筆者は、そのような評価は『身上書』執筆の現在の彼に、より多くあてはまると考えるのである。同時にまた、彼の時勢順応拒否の姿勢を、当時の敬虔主義者一般に見られる反世俗的・禁欲的モラルと同一視することも、誤りである。なぜならば彼は率直にこう告白するのである。いまの引用の続きである。

「そう考えて私は、敬虔主義者たちをものともせず、どんな不品行な人びとの集まりにでも、フェンシングや跳躍遊びにも、頻繁に参加した。要するに、私はあらゆる方法で、私が真ニ（原文・ギリシャ語）ルター教徒であり続けよう、そして「敬虔主義者流の」世間から引きこもった生活によって異端の疑いをかけられないようにしよう、と欲していることを示したのである。」（75）

この記述を読むかぎりでは、ディッペルは正統派の、人並みに世俗的な学生にすぎないように見える。しかしこれにつづく記述は、彼のそれとはまったく別の一面を開陳する。それはこうである。

「そして私はそういう行状のために絶えまなく私の良心において神から懲らしめられたにもかかわらず、家でひとりになったとき、神からいっさい（の罪）を、お祈りをし、そして「賛美歌を」うたうことによって買いもどそうと思った。こういう勤行を私はまったく人にかくれてやっていたので、もしだれかがそういう私の祈りの現場をとらえてもすると、私は何かひどい非行の現場をおさえられでもしたときよりも、もっと驚愕した。敬虔ぶりという名前や

評判だけですら、私はそれほどまで恐れていたのである。私は神のおん前で嘘いつわりない真実を述べているのである。」(75—76)

要するに、ディッペルは人まえでは正統主義者としてふるまいながら、ひとりになると祈ったり賛美歌をうたったりというような、敬虔主義者がするような勤行をした、というのであるが、彼がなぜそのような勤行をしたか、筆者には理解がむづかしい。もし彼が、不品行な行状ゆえに神の懲らしめを受けて良心の苛責を感じたので、そうしたというのであれば、理解できるが、しかし彼の告白は、良心の苛責を感じたにもかかわらず、というのである。あるいは、「良心において」神から懲らしめられたことで罪はすであがなわれた、それにもかかわらず、というように彼は考えたのであろうか。いずれにせよ、筆者の理解のおよばない文言であるが、この「良心」という語は、実は『身上書』ではここで初めて出てきた語である。そして、良心において神から懲らしめられた、という表現は、彼の心のうちなる宗教体験の最初の告白である。彼自身、「神のおん前で嘘いつわりない真実を述べているのである」という以上、この告白の真実性を疑うことはできない。そこで問題は、当時のディッペルの敬虔主義にたいするこの奇妙な関係をどのように理解すべきかである。思うに、たしかに彼の理性は敬虔主義を敵として批判攻撃することに懸命だったが、しかし懸命になればなるほど、心のなかでは敬虔主義にたいする関心が、それと気づかれぬうちに次第に増大してきて、敬虔主義者たちがすると同じ祈るとか歌うというような、きわめて宗教的な行為をおこなわせたのではないだろうか。とは言ってもしかし、敬虔主義者と同じことをするということが、敬虔主義者であるということとは、まったく別である。彼が敬虔主義者になるまでには、長い道程を歩まなければならない。

ところで、略伝でも見たようにディッペルは、マグステルの学位を「一般に無知をおおいかくす蓋として売られるものである、と見て、私には「マグステルなんぞよりも」はるかに多くの値打ちがあると思ひこんで」(76) 軽蔑していたにもかかわらず、その学位を取得したおもな動機は、「ある教授から、自分は昇進ノ機会をのがさないように、マ

ギステルになろうと思う、なぜならば、自分自身マギステルである者よりほか、だれもマギステルをつくることのできないからだ、と聞かされたことであった。」(76)そこで彼は、「将来いかなる事柄においても欠けるところがないように」(76)ありたいと考えて、学位論文を書き始めたのである。

さて、このマギステル取得についての一連の告白において、二つの注目すべき心性が指摘される。その第一は、マギステルをとるにたりない名称として軽蔑し、自分はそれよりはるかに価値をもつとする、自己の内面的価値ゆえの誇りであり、第二は、何ごとにおいても欠けるところなくありたい、という完全主義である。この二つの心性は、シュペーナーやフランケ(アウグスト・ヘルマン、一六六三—一七二七)のような敬虔主義者たちには見られなかった、むしろ、近代的人間の特性であろう。ということとは、つまりディッペルがドイツの啓蒙主義以前のこの時代にあつて、すでに近代的人間の心性をある部分ではかなりの程度まで先取りしていた、ということにならう。そして彼のその後の思想的な、また生活上の遍歴を通じて、この二つの心性は彼の姿勢ないし行動の根底に不変に横たわっていることが注目されよう。というのも、彼がその後シュペーナーの著作を読み、シュペーナー流の敬虔主義に接近しながらも、そういう敬虔主義者になりきることができなかった原因は、まさに彼のこのような人間的特性に求められるからである。

さて、そのシュペーナーに『身上書』が初めて言及するのは、マギステルになったディッペルが父の要求にしたがつてオーデンヴァルトで家庭教師を勤めていたころの記述である。大学にのこつて研究を続けて、やがて教授になりたいたと思つていたディッペルにとって、家庭教師になつて田舎へ行くということは、ひとつの頓挫を意味したことである。彼はそこから脱出する手段として、敬虔主義攻撃によつて有名になることを考えたのである。「ここで私は今や空想のなかでパトモスの島に福音書著者ヨハネとともにいて、そして背に羽根をはやして再び大学へ戻り、私の目的を達することができるように、どのようにして敬虔主義者たちにたいして公開状を書こうかと思案した。」(77)パト

モス島は、言うまでもなく、ヨハネが主の日に大いなる幻を見た場所である。ここで「公開状」と訳した語は、原文では Offenbarung であり、これはまた、「天啓」、「黙示(録)」の意味でも用いられる。さて、ディッペルは続けて次のように述べる。「けれども私が孵化しようと思うものは、独特なものでなくてはならなかった。それゆえ私は、敬虔主義者たちにたいして象徴の教義を材料にし論争することを欲しなかった。というのも、そういう論争は私にはあまりにも此事に拘泥するものと思われたし、また健康な理性(＝常識)は私に容易にこう教えてくれたからである、私たちの象徴ノ神学者たち(＝正統ルター派の神学者たち)が一致信条(Formula Concordia)を規準としているのと同様に、敬虔主義者たちはドクトル・シュペーナー氏の著作を規準とする能力と権利があるのだ、と。」(77)

正統ルター派の神学者たちが一致信条を規準とするのは当然のこととして、敬虔主義者たちがシュペーナーの著作を規準とするのもまた当然のこととするディッペルの考え方は、もし彼がすでにその当時本当にそういう考え方をしていたとすれば、それは宗教的寛容と呼ぶにふさわしい卓見であろう。しかしこの告白にも、視座の時間的混在がありそうである。というのも彼がこの当時、敬虔主義者たちはシュペーナーの著作を規準とするのは当然だと判断できるほど、シュペーナーを熟読していたかどうか、はなはだ疑問だからである。同じこの『身上書』の後段の記述によれば、彼が「ドクトル・シュペーナー氏の著作を熱心に通読しよう」と決心した(81)のは、彼がシュトラースブルクへ行ってからのことである。少くともオーデンヴァルト時代のディッペルは、正統主義の神学者たちがつ欠陥に腹だたしい思いがし、一致信条のすべての箇所によく多くの疑惑をいだくようになる一方で、「しかし私は敬虔主義者たちをいっぴひとからげに、信仰の根底を思いちがいでいる狂信者が邪教の徒として、やっつけてやろう、それも、彼らが義認の根本簡条において真面目なルター教徒たちと一致していると公言しているのだから、彼ら自身の同意セルコトガラを材料にして、人間的ニ(原文ギリシヤ語) やっつけてやろうと思った。」(77) というのである。

彼は、「至福を与える信仰は教義の誤謬をどこまで容認できるか」(77) という問題について論文を書いて、敬虔主

義者たちを攻撃し、この論文を自分の以前の先生に送って校閲と批判を求めたが、その真の狙いは、自己の主張の神学的な正否の鑑定ではなくて、みずから告白するように、「私の以前の」センセイ（先生）の目と、同様に先生がそれを回読させるであろう人びとの目に、私を偉大に見せる」（78）ためだった。しかしこの論文はそのようなもくろみに反して、人びとの反感をかい、彼は大学で講義をする許可を得ることができず、すでに略伝で述べたような経緯で、シュトラースブルクに赴いたのである。

三 — 2

このシュトラースブルクの滞在と同地を去ってダルムシュタットに到着するまでの帰り旅での冒険についての報告は、『身上書』全体の三分の一もの分量を占める。ここには他の普通の、あるいはハレ派の敬虔主義者たちの自叙伝であったならば、まったく語られないか、あるいは、語られても、せいぜいのところたとえば「罪ぶかい」とか「世俗の悪にそまった」というような形容詞で要約され抽象化されるであろうような体験がつきつきに報告される。以下、順を追ってそれを見ていこう。

ディッペルが自分の意図を実行に移す場としてシュトラースブルクを選んだのは、この町を主邑とする「エルザス地方では敬虔主義者たちはあまり評価されていないと、ひとから聞かされて、そう信じていた」（79）からであるが、しかし敬虔主義の創始者シュペーナーが一六六六年まで無任所牧師を勤めていた、そして今なおこの地方に多くの友人と親戚をもっている——ということを知らずに彼はこの町へやってきたようである——シュトラースブルクでは、彼の意図は最初から達成の可能性はなかった、と見ていい。彼は講義をする許可を受けるべく、いろいろ努力をしたが、大学は結局、彼の申請を却下した。その後のなりゆきは以下のとうりである。

「ところが、私の売りこみと企て（の失敗）は短時日のうちに町じゅうに評判になり、同時にまた私の同国人たちが私のことを言いふらしたので、町じゅうどこの横町へはいつでも人びとは私を高等遊学のマギステルといったのだったが、これはまた鬱憤やるかたない私にいくばくかの清涼剤を与えることであつた。」（79）暇をもてあましたディッペルは友人たちの要望にしたがつて、観掌術——彼はこのト占術を占星術とともに若いころものにしたという——の講義をしてやったところ、評判になって、だれもが自分の当面の運命について彼の託言を聞こうとしてやってきた。彼はまた、時間を遊んで過ごしたくなかつたので、人びとに説教をして自分の意見を聴かせることを始めたが、これもまた民衆の拍手喝采を博することになった。その際は彼は自分の認識にしたがつて自由に真理を説いたが、「もし私の敬虔主義者たちになりたいする敵愾心と私の自由な生活ぶりが、人びとに私が正統信仰であることを確信させなかつたならば、疑いもなく私は〔異端の〕嫌疑をかけられたことであらう」（80）という。さらに彼の言い分を引用すると、「人びとのやり方と、この町の状況と、そしてさきほど述べたような大学で講義したいという私の意図（原文・フランス語）が妨げられたことが相まって、今や容易に私は紳士である」と公言し、そしてあらゆることにおいて単に高等遊学のマギステルとしてのみならず、名声たかい伊達者としてふるまうまでにいたつたのである。」（80）

名声たかい伊達者としてふるまうためには、それなりの資力がなくてはならないが、貧しい家に生まれたディッペルはどうやって資金をまかなつたのだろうか。右の引用に続く箇所はこの重要な疑問にこたえ、さらに彼の経済観念についても示唆を与えてくれる。「そして郷里にある私の財産が乏しいということが時おり私に憂鬱な思いをさせたにもかかわらず、私はその際いつも、すべての代金を払ってくれることができる裕福な未来の義父のこと（＝有利な結婚）を考えた。そのため、私は医者でもあつたので食べることに心配がなかつたから、毎日を豪勢にまた楽しくくらした。あしたのことを心配しないことと、神から給わたつたささやかな、とはいえ不足ない金の浪費癖ある管理人であることが、生まれつき私の心根に植えつけられていたのである。だから私には、自分ひとり楽しくくらすだけではなく

て、ほかの人びとのためにも金を払ったり、あるいは一着の服に四五十ターラーつかうなぞということ、ほんのちよつとしたことだった。そんなわけで私はシュトラースブルクで、半年間もきまった職がなかったのに、一年間で三百ライヒスターラー以上も使いはたしたが、家からは二百フローリン以上は貰わなかったので、私には、最初はたしかに気持よく貸してくれたけれども最後には酸っぱい顔をして敵意を見せるサイケンシャ(債権者)がたくさんできた。」(80)

このような浪費生活は同時に自墮落な、あるいは無頼な生活でもあるのが、世の通例である。ディッペル自身は決して自墮落でも無頼でもなかったであろうが、彼の友人仲間にはそういう種類の人間がかなりいたようである。無頼の仲間とつきあえば、当然なんらかの危険に出会わなければならない。彼もそういう危険に何度かおちいるが、そのたびにうまくそこから脱けだすことができた。それは、ディッペルによれば、神の関与によってである。右の箇所に続く記述は次のとおりである。

「しかし私がまちがった道を歩むとそのたびに、いつも私を懲らしめられ、私をご自身のもとへ引っぱってこられた神は、私にとらわれていた畏から私を解放しようと努められた。私はいずれかの社交クラブへ出かけていくと、ほとんど必ずといっていいほど、私が意図したわけでも希望したわけでもないのに、私の同国人ですでに他の大学で決闘をして有名になっていった者がだれか一人はいて、喧嘩や格闘という腹だたしいジケン(事件)がもちあがり、私はいつも仲裁人としてか、それともヒコクソニン(被告訴人)としてか、あるいは最少限でも証人としてまきこまれ、そのためシュトラースブルクの市参事会からは、あのイエーナの折り紙つき暴れ者たちの一人として注意人物視された。実際、あるとき他の人たちが二三人の商人の徒弟に店の中で襲いかかるといふ事件がおこって、私はその人たちといっしょに夜の横町から引きたてられ、フランス人たちによって衛兵所(原文・フランス語)へ連行されたが、そのとき私の同国人たちと友人仲間(原文・フランス語)は、この件で私の無実を知っていたので、私を釈放させるよう、衛兵所のみ

えでたいへん横着かつ無秩序な行動(原文・フランス語)に出た。そこで衛兵隊は彼らのなかへ鉄砲をうちこんだから、もしも神が不幸を防止してくださらなかったならば、疑いもなくだれかが私のために射殺されるか、負傷するところだった。ちょうどこの騒動のさなかに、代官のド・ラ・バステイユ氏が馬車で通りかかり、災厄を抑止しようと車からおりたので、この紳士が好意をいだいている学生たちの頼みによって、私はすぐさま拘禁をとかれたが、しかしこの状況はたくさんの炬火の光に照らしだされ、私をよく知っている市民たちが見物するなかで展開されたのであった。」(80—81)

右の箇所を読んで、ディッペルが徒弟襲撃事件に本当に関係しなかったかどうか詮索することは、神の目のまえでのごとく真実を告白しようという原著者にたいして、非礼というべきであろう。むしろ注目すべきことは、自己のいづれにせよあまり褒められない行状への後悔の念も、あるいは神の介入への感謝も表明されていないのが、ふつうの敬虔主義者たちのばあいとの著しい違いである。この事件が彼の心にもたらした感情として語られているのは、ただひとつ「恥辱」である。右の引用に続いて彼はこう述べる。「この恥辱のあまり私はかなり長い間ふたたび説教壇にのぼる気になれなかった。」(81)

こうして暫く遠慮していた説教活動を再開するころから、ディッペルは本気になってシュペーナの著作を読みはじめ、さらに神学の研究に精勵するが、それについてはのちにまた考察することにして、まずは、彼の身辺にやがてもちあがった新しい「ウンメイ(運命)」(83)について見ていきたい。というのは、彼は気晴らしのために相変らず時おり社交クラブを訪れていたが、そこである人がディッペルの目のまえで彼の同国人の一人によって瀕死の重傷をおわされるという事件がおこった。混乱のため犯人がすぐ特定できなかったので、ドイツ人ならばだれでも犯人でありうる、ということになり、衛兵隊は捜索を始めた。ディッペルの債権者たちは、彼の身柄を確保するために、二三人の傭兵をつかって彼を下宿に監禁しようと考えた。「これは私には耐えがたい恥辱と思われた。そこで私は先手を打っ

て、三四日ひそかに親友の一人の家にとどまり、そのあと誠実な仲間たちに見送られて客馬車に乗って市門を出て、ランダウ經由の帰郷（原文・フランス語）の旅路についた。」（84）時は一六九六年八月、プファルツ戦争のさなかライオン川をはさんで独仏両軍が対峙し、軽騎兵たちが徘徊するなかを、ディッペルは友人の一人が工面してくれた僅かの路銀をもって旅行しなければならなかった。しかし彼の浪費癖は改まっていたわけではなく、あとから送られてくるはずの荷物を待つために最初に滞在したランダウでは、知人の紹介でさっそく仲間を集めて飲食し、三週間で四十フローリンもの大金を浪費したが、もちろんそれだけの金の持ちあわせはなかったので、信用借りにして貰ったのである。

彼の次の滞在地はノイシュタット・アン・デル・ハールトであった。この町の城門の前まで軽騎兵たちが一時間おきに現れ、この町から先の街道は武装護衛隊といっしょでなければ通行不可能だったからである。彼は八日間に旅館で二十グルデン分もの浪費をしたが、財布のなかには三グルデンしかなく、ランダウとはちがってここには知人もなく、借金の保証をしてくれる者がなくて、完全に窮地におちいってしまった。以下、彼の報告をそのまま引用しよう。「さて、ここで私はやむなくシチゲイ（七世）のマグステルとしてちょっとした学生芝居をひとつ実演して、叩きのめされることなく脱出した。私はいずれにせよ毎日城門から外に出て、近くにあるぶどう園まで散歩をして憂鬱を散らすのを常としていたので、脱出はそれだけ容易に実行できるものだった。それで私は、散歩の道のりをのびし、街道が安全でなかるうとも、ヴォルムスを目ざして行こうと決心したが、しかし宿屋の亭主には、しるしとして（中略）品物をいくつか残しておいて、次の村から、感謝のしるしに支払いをするつもりであると、事実これは嘘ではなかったが、そう手紙を書いた。私の心情がむりやり迫られたこのいまましい出発によって、私はより大きな災難をまぬかれた。というのは、ちょうど同じ時にシュトラースブルクの私のサイケンシャたちは、いつのまにか私の旅立ちに気づいて、私を連れもどすべく数人の兵隊を備って追いかけてきたのである。兵士たちは、私がこの時刻には散歩す

るのが常だという亭主の話をきいて、安心して私を待っていたが、しかし無駄だった。また、シュトラースブルクにいる私の同国人とユウジンナカマは、次の村の街道に腰をおろして、もしも私が連れもどされるようなことになつたばあいは、むりやり私を奪いかえそうと待ちかまえていたので、ことは流血を見ずにはすまなかつたことであろう。このようなことすべてを私はそのとき、散歩によつてまぬがれたが、亭主は私がこのような散歩をするとはついで思つてもいなかったのである。」(84—85)

この記述は冒険物語としては『身上書』中もっとも面白い一節である。ディッペルは間一髪の危機をいささかいかわしい方法で回避することができたが、筆者の特別な注意をひくのは、この一件を報告する彼の口調である。他の敬虔主義者であつたならば、まずは脱出手段のいかかわしさに反省または後悔を述べ、このようないかがわしさにもかかわらず自分を窮地から救出してくれた神の介入に感謝を表明するところであるが、ディッペルはこの一件に神の介入があつたとはひとことも言わず、すべてを人間的次元での出来ごととして、しごく平然と語っているのである。

さて、軽騎兵にいつ捕えられるか分らない危険な道を急いで、やっとたどりついたヴォルムスでは、ライン川の向う岸に陣どつたドイツ軍が、どんな人間も渡河させまいと嚴重な警戒をしていたので、ディッペルはまたもや宿屋に八日間も足止めされたが、オッペンハイムではまだ通行可能であることを聞いて、マギステル指環を宿代六グルデンのかたに置いて旅館を出て、オッペンハイムに急行し、ライン川を渡ることができた。ところがスパイの潜入を恐れるドイツ側の將軍の命令で彼は衛兵所へ連行されて取調べを受けるはめになり、ダルムシュタット出身の役人と近くに住んでいた彼自身の弟の保証と請願によつて、ようやく家にもどることができたのである。

シュトラースブルクを發つて六週間、「コトノカクモ多クノ苦難ヲ通シテ」(86)故郷にかへつたディッペルが、自分のこれまでの人生の歩みをふり返つて見たとき、彼を大きな悲哀がおそつたという。そして、「私は、私がかいた恥とともに今や私のなかに神の矢を感じた。神の手が私を別のやり方で形づくろうとしていた。」(86)

「神の手が私を別のやり方で形づく」る、つまりディッペルが敬虔主義者に、より正確には急進的敬虔主義者になっていく過程は、以下のように読みとることができる。

早くしかるべき地位について借金を返さなければならぬと気が気でなかった彼は、ヘッセン・ダルムシュタット方伯に、自分が書いた論文を献呈して、方伯領内での奉仕を申し出る。領主の臨席のもとで彼がおこなった説教を聴いた人びとは、だれもが彼の「敬虔主義へのすばやいヘンタイ(変態)」(86)に驚き、彼は真理をよるこんで聴く人びとから大きな拍手喝采を獲得したという。「変態」は原文では *Metamorphosin* とあり、ゲーテの有名な『植物の変態』 *Die Metamorphose der Pflanzen* の変態とおなじ語であって、形態の変化、見た目の変貌という意味に解される。筆者はこれまでディッペルについて、「敬虔主義への転回」という言い方をしてきたが、この「転回」は「回心」 *Bekehrung* の意味ではなくて、「変態」の意味で使用したものである。「回心」が内実の質的な変化を意味するのにたいして、「変態」は内容の変化ではなくて、外形の変化を意味するのである。ディッペル自身、この敬虔主義への変態について次のように告白する。「しかし私自身の中身はそのさい狡猾漢であり、キリストの十字架の敵であって、そのとき敬虔によってとりわけ生活の利益を、つまり実入りの多い職と有利な結婚を求めていたのだ。」(86)

ディッペルが敬虔主義に本格的に接触したのは、すでに触れたように、シュトラースブルクでシュペーナーの著作を読み始めたときである。彼はそのとき、シュペーナーにたいする正統主義者たちの異端呼ばわりがどんなに不当なものであるかということが分かり、そして正統派の神学者たちはシュペーナーの敬虔と神の栄光をまもうとする熱意とに腹をたてて、危険な異端者として弾劾しているのだと考える。さらに彼は教父たち、とりわけルターが推奨するアウグスティヌスの著作を読んで、正統主義がどれほど人間に真理と正義から目をそむかせ、人間を畏におちこ

ませるものか、気づいた。「要するに私はいちどに考え方を変態させられて (metamorphosirt)、今や、今やすべての正統信奉は愚かしきであり、坊主どもの空虚なむだ話か口げんかであって、だれもが自分の党派と意見をふりかざして、正義を主張しているのだ、と確信した。いや、実際、私はカイギカ(懷疑家)になり、ほとんど無神論者にまでなつて、今やいっさいのものを疑いはじめ、どんな意見についてもはや確かなことが分らなくなつた。」(82)

ここでいう「無神論者」は、神の否定者ではなくて、ごく単純に、神をもたない者と解するのが適當であろう。しかし、こういう状態におちいったディッペルは、そのとき自分から神を求めたのではない。逆に、神が自分を求めてきた、というのである。「このような状態になつて、真剣に私を求める神は、ご自身をもっと多く私のうちに感じさせたもうた。」(82) ディッペルは、自分自身のうちに神を感じる、というこの神秘的な体験にもかかわらず、これまでの世俗的な生活を改めることができない。右の引用に続いて彼はこう述べる。「しかし私の目と耳はまだ神の懲らしめと声からそむけられたままで、私は、納得したことがらに逆らつて、相変らずこれまでの道をえらんだが、ただひとつ、敬虔主義者たちに敵意をもやして正統信奉をまもることだけはやめた。」(82)

以上がディッペルのシュトラースブルク時代の敬虔主義との関わりのあらましである。

ダルムシュタットへ帰つたディッペルは、すでに見たように、外見的には敬虔主義者へ変態していたが、中身は世俗的な欲望にみたされた狡猾漢以外のなものでもなかつた。かつて正統信奉の尖兵としてのディッペルが攻撃した人びとが、今は敬虔主義者としての彼に非常に好意的に接してくれることに、彼は驚くとともに、かつて自分が彼らにたいして攻撃的な態度をとつたことを遺憾に思ったが、しかしそのさい彼の心をつよく圧迫していたのは、「私はにせ信心家で、ただ現世の利害のためだけで正統信奉を放棄したのだと、ほかの人びとは臆測しはしないか、という恐れであつた。ふたたび故国を遠く離れて、だれも私を知るひとのいない土地へ逃げたいとしばしば思うほどだつた。」

(86—87)

右の叙述には、この『身上書』ですで見たと二つのモティーフの結合がやや違った形で見出される。それは、にせ信心への嫌悪と故国脱出への願望である。かつてディッペルは正統主義者として、たとえ国外退去のうきめを見ても信心をよそおうようなことをすまい、と固く決心した。今や外見は敬虔主義者に変態した彼は、人からにせ信心家と思われることを恐れて、故国出奔を願望する。ここで問題は、彼が実際ににせ信心家ではなかったかどうかであるが、この問いにたいする答として言えることは、真の信仰者ならばこのような他人の思惑になど何の関心ももたないであろう、ということである。

ディッペルの記述によれば、当時神が彼に「何回か不思議な夜の幻影」(87)のなかで、彼の故国での将来の運命を見せてくれたので、彼は神の指導に身をまかせて安らぐことができ、イエス・キリストの仲介役の秘密と、神によって与えられた至福の業と配済とに、上から理解の目を開かれ、より成熟した判断力をもって新約聖書を原語で通読して、「わが国の象徴の教義はパウロの書簡における聖なる霊の真意をあまり擱えていない」(87)と考えた。彼のこの報告は、彼がキリスト教の本質にたいへん接近したことを示すものであるが、しかしそれはあくまでも知的な接近にすぎなかった。彼は右の箇所にかけてこう述べる。「しかし真理のこの認識はおおむねまだ単なる知識と意見にすぎなかった。というのも、本質あるいはキリスト自身は私のなかにまだ真の新しい誕生への開悟を創出することができなかったからであるが、その原因は、私の肉が悪がしこくもその砦からまだ出ていこうと思わなかったことであつた。」(87)

ここで肉というのはもちろん霊にたいする肉のことで、この語からディッペルが霊肉二元論に立っていることが明らかである。肉から出てくる欲望、すなわち世俗的欲望にディッペルは、まだしっかり捉えられているのである。シュトラースブルクから戻った彼は、その冬を両親のもとで過ごし、春になったならばギーセン大学を訪れ、しかるべき職につくことを考へて、ある博士の論文に反駁する論文を書いてギーセンの神学者たちに予め送って同市へ赴いた

が、彼の志望は却けられたのみならず、彼が同時に進めていた結婚の計画も挫折した。この間の経緯を彼は次のように告白する。

「私の肉のこのような意図は、私がギーセンに到着したときには、かなり成功しそうに見えた。私はすべてが、つまり職と妻とそして他のだれでも望んだであろうものが、ひとつどころに集まっているのを見出して希望にあふれた。しかし神と、そして人びとの悪意ある判断への恐れとが、私を抑止したので、もしも私がそのようなヨコシマナ手段によって教壇かあるいは説教壇の聖なる場所にのぼることができたとしたならば、それまでには、私はなお大いなる闘争を戦わないでいられたことであろう。私の救いが私自身にとってよりもっと気がかりでいらっしやうた主はまた、他の人びとを通じて若干の妨害を介入させたもうたので、私のくわだてはいかがわしく、また臆病なものではあったが、(中略)完全に却けられ阻止され、思いがけない拒絶の回答を受けた。それだけではなかった。人びとは余計なことに、私が大いなる抗議とともに、運命を楯に立てて、敬虔ノアラユル救済ノ形象をもって申したてた求婚状を公表したのである。それによって私の敬虔は非常に汚された。しかし私はあとになるとこのことを慈悲ぶかい父(なる神)に心から感謝し、もう二度と、結婚によって自分の幸福を推進させようとはすまい、と完全に決心した。」(87—88)

肉にもとづく世俗的欲望がどんなに深く彼のなかに根をおろしていたか、右の箇所にも明らかであるが、さらに次の告白は彼の敬虔と敬神がどんなにうわべだけのものであるかを示している。

「しかしその間、名誉ある職への食欲は私のなかに固く根づいたままで、私は心のなかで、私の敬神がこうも長いことその報酬を待たされていることに、うんざりしていた。何しろ私は、(中略)今や神の目のままで非のうちどころなくふるまい、そして私にまだひとつのことが欠けていること、つまりキリストのために、私がこの世でなお持つかもしれないすべてのものを否定し、キリストにのみ仕えるという一事が欠けていることを、知らなかったのだから。真

理の認識とものごとを知る方式とを私はもちろん習得していた。しかしそれと同時に私の理性は、私のなかにある悪意の秘密を人間たちの目から、たまたもし可能ならば神の目からかくそうと試みた。」(88)

ここで「理性」が、他のいくつかの箇所と同様に、積極的な価値をもった心性としてではなく、ずるがしこく、計算だかい心的機能の意味で用いられていることは、ことさら説明を要しないであろう。いずれにせよ、ディッペルはここに報告したような生活態度を回想して、これを「にせ信心」(88)と呼ぶが、このにせ信心ゆえのひどい状態から彼を救いだしてくれたのが、「私の誠実な救い主」(88)である。この救い主は、「私の歩くあとをつけてきて、たえず私の悪がしこい心の扉をたたき、とうとう最後には私のところへよそから一人の誠実な案内人を派遣して下さった。その案内人は、自身のうちにある強い力によって、私の揺めくたくましいをたくさんの縛めのなわから解放して、正しい道へ導いてくれた。」(88)

この案内人こそが、一六九七年ギーセン大学へ歴史学教授としてやってきたゴットフリート・アルノルトである。まさにこの案内人ならびにその二人の同伴者との交際によって、ディッペルの内部においてすでに用意されていた敬虔主義への転向あるいは変態は決定的になる。その際、彼のうちにおこったことは次のようなものである。

「けれども最初から私のうちにおったにせ信心家は、私がこの兄弟たちとイエス・キリストにおいて交際したとき、恐れ震えていたが、しかしすべての隠れ家から退去しようとせず、神おひとりに名譽を与えることを欲しなかった。しかし、やがて私はおおくのきびしい闘争ののちついに私のたましいの友(「イエス・キリスト」)に、この友ひとりのためにのみ生き、そしてこの世の利益ゆえに人間の気に入られて生きるようなことをしないよう、承諾のことばを与えた。今にしますます私は、私をふたび掴まえようとする悪魔の畏と罪の勢力を感じた。私のこの世での貧乏、作った借金、私の両親や親族のせつなる要求が、多くの理性の忠告と信じられないほどの恐怖を私に吹きこんだ。誘惑者たちが私をさそった。彼らは私にこの世の諸王国とその栄華を見せて、彼らのご馳走を私がどうしても食べる気にな

れないことに、もうほとんどやっきになった。私は初めてキリストの名において「天なる」父を求めて叫ぶことをまなんだ。そして聖書やその他の書物を読んだり研究したりすることのすべてが、そのとき私にはうとましく、それは私の死であった。というのも私は今や頭のなかに章句や文字がいっぱい詰まっていたが、しかしまだ実行する力と生命がどうしても見つからなかったからである。こういう状態で私は、時間の大部分をひとりだけになって体を横たえたり散歩したりすることで費やし、またどんな人間にも私の胸中をうったえなかった。というのも、私を癒そうとお願い、また癒すことのできるのは、ただ主お一人だけだったからである。」(89)

「たましいの友」すなわちイエス・キリストについては承諾の言葉を与えたことによって、ディッペルは完全に敬虔主義に変態したと見られる。これを変態あるいは転向と呼んで、回心と言わないのは、他の多くの敬虔主義者のばあいにくらべて、明瞭な差異が認められるからである。敬虔主義的回心のもっとも典型的な例であるフランケのばあいを、彼の自叙伝『回心の発端と経過』に見てみよう。二十四歳のフランケは、神を求めて神を見出すことのできない不安のなかで、ひざまずいて、まだ知らない、したがって信じていない神にたいして、もしまことに神が存在したもうならば、自分をこの悲惨から救いたまえ、と叫んだ。そのときおこったことは、次のようなものである。

「神は私の願いを即座に聴きいれ給うたのです。(中略)というのも、掌を翻すかの間に、私のあらゆる疑惑は消え失せ、私は心の奥底でイエス・キリストにおける神の恩寵を確信しました。(中略)心のすべての悲哀と不安はたちどころに取り去られて、私は歓喜の奔流をとつぜん浴びせかけられたかのようにでした。(中略)このとき以来、私のキリスト信仰は不変のものとなりました。このときから私には、神にふさわしからぬもの、世俗の欲望を否定すること、この世のうちに貞潔に、公正に、敬虔に生きることが容易になりました。」

フランケの回心とディッペルの変態との間には、何と大きな違いが横たわっていることであろう。フランケは「歓喜の奔流」とか、その他さまざまな言葉で、彼が到着したいわば安心立命の境地を表現しているが、そういう語句は

ディッペルの叙述のどこにも見えない。むしろ、誘惑、不安と恐怖にいよいよ震えおののき、自分の無力を嘆く彼の姿が彷彿するのである。

両者の相異点がどこに由来するかは、深い考察を要する問題であるが、ディッペルがキリストに承諾を与えながらなお安心立命できない理由は、『身上書』から容易に読みとることができるといえる。というのは、『身上書』からの右の最後の引用部にすぐ続く記述によれば、アルノルトがギーセンへやってくる直前に彼が書いた『正統信奉者タチノ冥府体制』が、この問題と深くかかわっているらしいのである。つまり、この刺激的な題名の小冊子で、「私は、私の良心のいっさいのよりよい確信に反して、それ以外ではたいへん自由にもを言っていたにもかかわらず、今にしてなおわが国の長老たちの教説にのっとって論じたのであったが、それは目前に迫ったこの国での私の博士号取得を棒にふるたくなかったからである。」(89) というのである。「わが国の長老たち」というのはどの人びとか、またその「教説」が具体的にどのようなものであるか、筆者は知らないが、注目すべきは、ディッペルのこの小冊子の執筆にさいして、「博士号取得を棒にふるたくなかった」という世俗的な思惑ないしは功名心が働いていたことである。この小冊子は当然のように反響を呼んで、彼の敵対者はこれに対抗して、「かなり粗暴な自己弁明の論」(89) を刊行し、彼はこの論争には結末がないと見てとり、さらに彼のそのときの状態が彼の神学的才智を狂わせてしまったという。以下、彼の報告をそのまま引用すると、「私は今や現世的なまくろみからはほとんど解放されていたが、ただ外部からは、私の敵たちがたてる、私が当時空席だった神学第三講座を手に入れようと懸命になっている、というような噂が、まだ私を悩ませるだけであった。」(89) という。彼がこの段階で現世的なまくろみ、すなわち俗世の功名心から解放されつつあったことは、彼自身報告するとうりであろう。神学第三講座については、「他の人びとが私の知らないうちに私を推薦していた」(89—90) ということである。いずれにせよ、そのような噂にたいして、「私は今や、自分がそんなものを全然重視していないこと、そして通常の敬虔ノ実践もまた私にとってはまったく満足のいくものではないというこ

とを示そうと思つた。それゆゑ熱意にもえて短日時のうちに Papismus Protestantium vapulans すなわち『抗議派の教皇制度に鞭をくわえる』の書を書いた(90) たという。この執筆動機のうち特に注目にあたいするのはその後半、すなわち「通常の敬虔ノ実践もまた私にとってはまったく満足のものではない」という部分である。つまり、正統主義者から敬虔主義に変わったディッペルは、その敬虔主義にも満足できないで、さらに急進的敬虔主義へと飛躍して行くのである。この書物は、「ひとつの火を点じようという神の特別の先慮が働いたので、妨害をうけずに公刊されないわけにはいかなくて、そして押収処分をうけるよりも早く、ドイツの全土に散布されたのである。」(90)

この書物がまだ印刷中であつたとき、ディッペルが神学第三講座の教授に暫定的に任命されたという噂が流れた。彼は、このような職を得るべくいかなる人間にも頼んだわけではないが、もしも実際にその地位が自分に提供されたならば、説教と生活において自分の良心の自由をまもることを條件に、それを受諾することを決心した、という。そして、「今やここで好奇心にかられて、私は神をためそうと思ひ、手紙を書いて、この件でいちばん確實だと思われるある人物から、この問題で私のために、(傍点は筆者) 宮廷ではどのような決定がなされたか、探りだそうとした。私はまた国の外へ出ていこうと思つているかのような態度をよそおつた。」(90)

神をためそうというようなでしゃばりは、およそ敬虔主義者に似つかわしからぬ、また教会内の敬虔主義者のだれにも絶対に見られぬであらうような態度である。ディッペルのこの神は、すでに見てきたように、彼がまちがった道を歩むとそのたびに、彼を懲らしめ、ご自身のもと引っぱってきた神(80)であり、また、真剣に彼を求める神(82)であり、さらに彼の救いが彼自身にとってよりもっと気がかりである主(87)であり、そして彼の歩くあとをつけてきて、絶えず彼の悪がしこい心の扉をたたき、最後には外からひとりの誠実な案内人を派遣してくれた救い主(88)なのである。このように彼にとってごく身近な神であるがゆゑに彼は一種独特な親愛感をもって、あえてためすというような態度に出たのであろうか。少くとも、このような神とつきあうためには、世俗とか私心とかいふものを完全

に放棄することは必要ないと見え、ディッペルは、「私のために」宮廷でどのような決定がなされたかを探りだそうとしたのであり、さらに事を自分に有利にはこぶために、国の外へ出ていこうと思っただけかのような態度をよそおったのであろう。彼の国外退去への志向が、にせ信心家、偽善者の誹りを避けたいという願望と結びついていたことは、すでに見たとおりである。

「しかし神によって定められた〔退去の〕時はまだ来ていなかった。まえもって私はモーゼとともに、エジプトの男、すなわち教義の現場監督人にたいして殺人行爲をおこない、そのあと砂漠へ行って神ともっとよく知りあいにならないではならなかった。そうしたあとで、私はエジプトで神をたたえ、神のすばらしさを宣べ伝えたり、あるいはバベルで真理を証明し、そして幾人かの者を神の子たちの自由な天地へつれ出すことができると思った。」(90)

今やディッペルは自分をモーゼになぞらえ、正統信奉者への批判攻撃をモーゼのエジプト人現場監督殺し〔出エジプト記〕第二章二二)にたとえ、予感される自分の国外退去をイスラエルの民を率いたモーゼのエジプト出国と見なすのである。右の箇所を引き続いて彼はこう述べる。

「もしも私が、私を買いとってご自身の愛の絆のうちに抱かれていた主を、否定しようとしたならば、私のあの本がすでに書かれたあとであっても、エジプトで肉のなべ〔出エジプト記〕第十六章三)のかたわらにとどまって、私に提供された世の財宝をつかみとることが、今や私の勝手であったにもかかわらず、私は、私のガクイシケンカン(学位試験官)たちが、救いを促進するために書かれた私の造反的な本を口実にして、私のうえにもたらした些少の苦しみを、喜んで耐えしのび、主の忠告にしたがおうと思った。主の導きはすばらしく、また効能があった。というのも私がそのような紛糾のなかにあつて、私の悪がしこい肉の多くの誤った意図と畏から解放されただけではなくて、他の人びとの心底もまた私に開示され、そして多くのにせ信心家たちが自分たちの心の、嫉妬と功名心が敬虔の舵をとっている陰險な奥底をあらわにしたからである。」(90—91)

ディッペルが今や肉の意図と畏、すなわち世俗的な欲望や功名心から解放されたと言ふことができるのは、たしかに彼自身が述べるように、すばらしい、そして効能ある主の導きがあったからであらう。しかしあえて俗なる詮索をめぐらすならば、右に引用した記述は、ヘッセン・ダルムシュタット方伯領といわばその藩校であるギーセン大学の諸状況から推して、ディッペルが自分の教授就任はもはや不可能であることを認識して、この永年の志望を断念し、心の中で国外退去の準備をしていたことを反映するものではあるまいか。自己の功名心を棄てたとき、他人のにせ信心ぶり、偽善ぶりがよく見えてくるということは、世にある例である。功名心を棄てた人間でも、決して棄てることのできないあるいは棄ててはならないものがある。それは自己の信念である。ディッペルのばあい、それは真理の擁護者、普及者としての自分の使命感である。恐らくは、この使命感から彼は、ほどなく『ぶどう酒とオリブ油』を世に問うて、国内のすべての人びとを敵に回し、訴追されて国外に逃亡することになったのであらう。『身上書』は右の引用箇所が続いて次のように述べる。

「自分たちの信団(＝ゼクテ)の蒙昧と偏見のゆえに今なお真理にさからっている人びとにたいして、私は(霊的な意味での)割礼にもとづいて(抗議派の)鞭打たれた教皇制度のゆえに先述のくわしい宣明を書いた。そしてそのさい同時に、真理を認識しながら生活においてその真理を汚している人びとに、神学的才智や欲ふか牧師は滅びへむかって急いでいることを、確信させようと思った。この本末を顛倒している人びとは、私の意図にたいして、そのようなやり方で壺のふたをとるべき時ではまだない、ということ以上の異議をとることはできない。彼らはしかし、その時はきている、主は御裁きにおいて彼らの政治的手腕や理性の方法を範とされないだろうということを知らなかつたのであらう。その主の命令によって私は、ユダヤ人と異邦人たちにたいする躓きの石とならなくてはならなかつたのであり、私の才智によってではない。私の肉は神学的才智ゆたかであり続けたがっていたし、また敬虔ノ報酬を世のまえで安楽に、富貴と榮譽のうちに享受できたであらうけれども。」(91)

『抗議派ノ教皇制度ニ鞭ヲクワヘル』執筆についてのこの弁明は、弁明の域をこえて、彼のまだ書かれていない次の論文『ぶどう酒とオリブ油』の精神から発するまさに新たな攻撃である、と見ることができよう。正統主義たちのみならず、「真理を認識しながら生活においてその真理を汚している人びと」——つまり恐らくは教会内敬虔主義者たち——をも批判の対象にして、いわば宣戦を布告するのである。そしてその戦いはあらゆる苦難を要求するだろうということもディッペルは承知しているにちがいない。霊的存在としての彼は、主の命令によって、その苦難のなかへ赴こうとしている。しかし彼の肉は彼の霊とすんで行動をともしようとは思わない。「神学的才智ゆたかであり続けたが」り、また「敬虔ノ報酬を……享受できた」はずの肉は、恐らくは霊の高揚に圧倒されて、霊の要求に服従しにすぎないであろう。ディッペルは霊肉二元の生を生きているのである。

以上でディッペルの「これまでの生き方」の報告、つまり履歴そのものは終る。これに続く最後の箇所は、この報告にたいするディッペルの自己評価にあてられる。ここで彼は一段と個性を鮮明にし、自信にあふれてこの身上書の真実と率直さを強調して、次のように結ぶのである。

「以上（の記述）は、すべての倒錯した党派に対抗すべく、私のこれまでの生き方について報告しようと思った事実である。もしすべての身上書がこれと同じ率直さをもって書かれるようなことになれば、弔葬説教の身上書に見る嘘だらけの賛美は影をひそめ、だれも簡単にそんな賞賛状を要望しなくなるだろう。私にたいしてもっと反対のある人は、自由にこの履歴を書きまし、訂正するがいい。というのも私は簡潔をむねとするため、何もかもに触れるということではできなかったし、またすべてのことが順序正しく私の心に浮んできたわけではないからである。だれかほかの人が私のまだこれからの歩みを書いて、私自身の悪漢をできるかぎり正確に裁いてくれるといい。そうすることが私にたいする親切というものだ。そしてまた主には、私とそして主を求めるすべての者に、これからさき信仰の戦いにおいて確かな歩みをお許しくださって、私たちのだれ一人も回避することなく、背後にあるいっさいを忘

れて、私たちの信仰をはじめられ、そしてそれを完成されるお方であるイエスおひとりだけを見て、目のまえに差しだされた宝石を、「回り道や立ち止りをするこなしに手に入れられるよう、思しめし給わんことを、アーメン！」
アーメン！

四

以上、『身上書』に即してディッペルの前半生を考察してきたが、その「生き方」(74)は「変態」Metamorphose、Verwandlungの語に要約されるであろう。「変態」とはすでに述べたように、中味あるいは本質は同じであり続けて、外見上の形態が変化することであるが、生まれながらの正統信奉者から敬虔主義者、さらに急進的敬虔主義者へのディッペルの移り変りは、結局のところ考え方の変化でしかなく、中味の人間そのもの、彼の自我は終始同一であり続けたと見なければならぬ。少くとも彼がキリストに承諾の言葉を与えたとき、彼は他の多くの敬虔主義者の「回心」におけるような、生まれ変わって別人になった、つまり再生して神の道具となったというような徴候は見られず、彼は彼であり続けたのである。

それではその彼の自我とはどのようなものであろうか。それはたしかに、霊と肉の二元に分かれたらという、多分に前近代的な性格をのこしている一方で、自身の才能にたいするほとんど絶対的な自信にささえられた強固な自我である。この自我は、神との関連で見ると、神のまえでもおのれを決して棄てることなく、神を求めるよりも多く神から求められるのである。世俗すなわち人間社会との関連でいえば、恐らくは才能への自信と誇りにもとづくことであろうが、自己を完全なものとして世のまえへ示さないではいられない。男らしくあること、恥辱をうけないこと、そして何よりもまず、にせ信心家ないし偽善者と見なされないことが重要なのである。自己の信念をまもって、どの

ような苦難にも耐えようと思い、国外退去の憂きめをも辞さない。このように強烈な個性ゆえにディッペルは、宗教上の考え方においては、単なる教会内敬虔主義に安住することができなくて、急進的敬虔主義へとさらに変態することになったのである。この傾向がさらに強まれば、結局最後に行きつくところは、徹底的な個人主義となろう。また世間との交際においては、宥和や妥協のすべを知らず、しばしば衝突をくり返すこととなる。ディッペルがベルレブルクでいっさいの宗派・信団の人びとと交際をたち、ほとんど隱栖同然の最晩年の生活をおくったのは、まさにそのような個人主義のしからしめたものであろう。

いくたびか変態をかさねてきた個人主義者ヨーハン・コンラート・ディッペルのなかに、あの靈肉二元の人間觀にもかかわらず、全体として近代的人間を見ることは、かならずしも困難ではない。

注

(1) 次の三文献を参照した。

Albrecht Ritschl: Geschichte des Pietismus, 2. Bd. Der Pietismus in der lutherischen Kirche des 17. und 18. Jahrhunderts, 1. Abt., Bonn 1884, S. 322ff.

Marianne Beyer-Fröhlich (ed.): Pietismus und Rationalismus (Deutsche Literatur in Entwicklungstreihen, Reihe Deutsche Selbstzeugnisse, Bd. 7), Leipzig 1933.

Martin Schmidt: Dippel, Johann Conrad, in: Neue Deutsche Biographie, Bd. 3, hrsg. von der historischen Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaft, Berlin 1957, S. 737f.

(2) 注(7)を参照のこと。

(3) M. Schmidt: a. a. O., S. 738.

(4) vgl. Beyer-Fröhlich (ed.): a. a. O., S. 68 f.

(5) 伊藤利男『ドイツ敬虔主義と自叙伝』(高橋義孝先生還暦記念論集)「ゲルマニスティクの諸相」昭和五十年 27—37ページ)

を参照のこと。

- (6) Das Leben der Glaubigen / Als Der Weyland Hochwürdige / in Gott Andächtige und Hochgelahrte Theologus, Herr Philipp Jacob Spener ... Franckfurt am Mayn ... Anno MDCCV. S. 30.
- (7) Beyer-Fröhlich (ed.): a. a. O., S. 103.
- (8) Beyer-Fröhlich (ed.): a. a. O., S. 26 ff.

付記 『身上書』本文の読解にあたって若い同僚の池田紘一氏と谷隆一郎氏の助言をいただいたことを記して感謝の意を表す。